

ロマン・ロラン＝高田博厚往復書簡クロノロジー

高 橋 純

日本人彫刻家高田博厚は1931年春にパリに到着し、その後間もなく始まったロマン・ロランとの交流はこのノーベル賞作家の没年まで絶えることはなかった。以下に抜粋を紹介する二人の往復書簡がその証である。以下の往復書簡はフランス国立図書館手稿保管部所蔵の、ロマン・ロランから高田博厚宛て書簡9通(FF. 1-2, 3-20, FONDS ROMAIN ROLLAND)および高田博厚からロマン・ロラン宛て書簡14通(FF. 39, FONDS ROMAIN ROLLAND)の抜粋である。

		抜 粋	補 注
1	1931/4/13 高田 → ロラン	ついにあなたにお会いすることができました。私の歓喜は言葉に言い尽くせるものではありません。永らく、実に永らくわが夢でした、あなたが住まう国を一度なりと訪ねてみるのが。ヴィルヌーヴでの二日間が私の内で光輝いています。……日本にいる時には、私は一度もあなたに手紙を差し上げたことはありませんでした。自分の貧しいフランス語でもってあなたに向かって自分の思いを述べるなど実に憚られることだったからなのですが、私の思いはいつもあなたのもとにありました。	高田がロマン・ロランに書いた生涯初めての手紙である。1931年3月下旬にパリに到着した高田は、間もなく日本への帰国を控えていた片山敏彦に伴われて4月2日にスイスはヴィルヌーヴのロマン・ロランの私邸ヴィラ・オルガを訪ねた。また、ロマン・ロランもこの印象深い出会いを日記に記している。(日記抜粋①)
2	1931/6/30 高田 → ロラン	イタリアに旅行し、6月の終りにパリに戻ったのですが、私はすっかりルネサンス芸術に魅了され、高揚し、圧倒されてしまいました。今はルネサンスの黄金の風が私のまわりで渦巻いています！とにかく、システーナ礼拝堂を見たことで旅の第一目的は果たされ、私は完全に虜になってしまいました。芸術におけるこのような存在に出会ったら、誰一人平静でいられるはずがありません。これは人間の力を超越しています！……このイタリア旅行を終えて、ゴシックの本当の意味を理解することができたように思います。私は今、フランスの本性とその血がゴシック建築の精髓とどんなつながりがあるのかを知ろうと夢中になっています。	この年の6月に高田は「イタリア巡礼」をした時の手紙である。システーナの殿堂は、この前にも〔この巡礼の往路の時〕ほとんど見物がいなかったが、今度は私一人である。堂の周囲の腰掛に寝そべて、仰向けになって「天地創造」を眺めていた。これがはじめてだった。その夜宿に帰って、私はスイスのロマン・ロランに書いた。「彼」に書きたくなった……「ここに天地は窮る……」

		抜 粋	補 注
3	1931/7/6 ロラン → 高田	システィーナの煌きがよぎる手紙をありがとう……あなたの言う通りフランスの「血」とゴシック彫刻の間には密接なつながりがある。それは民族大移動以来の歴史があり、そのことは今なおフランス各地の建築に認められる。そして私の名前Rollandも、[スウェーデンから出た種族の出自の名残りGotlandを留めているのです。]	システィーナを見て感激し、師ロマン・ロランに書かずにいられなかったという先の高田の手紙(31年6月30日付)に対する返事の絵葉書であるが、高田の感動に対する理解とともに、ロマン・ロラン自身のゴシック芸術観を伝える貴重な証言となっている。
4	1931/11/25 高田 → ロラン	私は長年自分が抱いてきた思想的矛盾を克服すべくコミュニストたらし、豚小屋に入れられたこともありましたが、こうしてフランスにやって来たことによって、その矛盾は一層深くなってしまいました。	
5	1931/12/2 ロラン → 高田	ガンジーが次ぎの日曜(6日)にヴィルヌーヴにやってきて、11日金曜日の晩まで滞在します。ついてはこの封筒の中に百フランス・フラン三枚を入れておきます。できたら、日曜の夜行列車でいらっしゃい。ただし良いですか、パリでは誰にもこのことは話さないでください。なぜなら、どうして自分たちも招待してくれないのかとか、せめて自分をガンジーに紹介してくれないのかと私を責めるに違いない人が多過ぎるからです。	このとき高田一人をパリから招いたことに関連して、ロマン・ロランが書き残した日記を参照することができる(日記抜粋②)。この時まで高田は、4月初めに片山に連れられてスイスのロマン・ロランを一度訪ねただけだった。「二週間後に片山は日本へ発ち、私は独りになり、イタリア巡礼の旅に出た。ローマでシスティーナの「天地創造」に圧倒されて、スイスの師に手紙を書いた。それきりだった。丘と森のあばら家、冬と共に孤独の生活が始まった。ストーブにたく石炭も買えず、木片を拾ってくべている折に、書留が来たのであった。その日の夕方訪ねることになっていたマルティネの家族だけにはこのことを知らせた。」(p. 121)
6	1931/12/3 高田 → ロラン	私は今朝あなたから届いた手紙に感激のあまり、私に対するあなたのご配慮にどのように感謝の気持ちを表したらよいのかわかりません。ガンジーに会えるとは、何という喜びでしょう。心底感動してしまいます。無論私は彼に会うためにあなたの元に伺います。そしてできることならば、粘土像のエスキスを作るためのガンジーのポートレートを描きたいと思っています。	

		抜 粋	補 注
7	1932/4/25 ロラン → 高田	来る5月初めから15日までの間、私の胸像製作のためにヴィルヌーヴに来る気はありませんか。きっと一番良い時期ではないかと思います。あなたが元気で過ごしていることを期待するとともに、東京からはご家族の便りがしっかり届くよう願っています。この手紙には旅費として100スイスフラン1枚を同封しておきます。一番良いレートで交換すれば500フランスフランくらいになるはずです。	この手紙と、先行するロマン・ロランの手紙で予告される高田のヴィルヌーヴ訪問については、ロマン・ロランの日記抜粋参照（日記抜粋③）。
8	1932/4/27 高田 → ロラン	今朝あなたからの手紙を受け取り感激しています。無論私は熱烈に望んでいました、早くヴィルヌーヴに赴いて、最高の喜びを噛みしめつつ壮大な仕事を成し遂げることを。しかし私の逼迫した生活状況のためにそれが叶いませんでした。私は元気でやっておりますし、常にやる気に溢れているのですが、今だけは少し落ち込んでいます。というのも、「ユマニテ」を読んで知ったのですが、ひと月前に日本では коммуニストの大量検挙があったのです。そしてその時以来私には家族の消息がつかめず、不安に思っていました。	
9	1932/9/23 ロラン → 高田	ヴィルヌーヴに戻り、あなたの手紙を見つけました。取り急ぎこれを書いています。あなたが個人として前面に出てはなりません！ あなた自身が巻き添えになるようなことをしてはなりません！ 敢えてそれをすれば無用な犠牲を払う羽目に陥りかねないし、おそらくあなたにとって致命的なことになるでしょう。なぜなら、[日本政府]はあなたの生涯にわたって、国に帰る道も、家族のもとに戻る道も閉ざしてしまいかねないからです。——— これから私自身の手で抗議文を（訳文を修正したうえで）ユマニテに送り、カシヤンの支持を得て紙面に載るように計らいます。今日のところはこの件についてこれ以上は言わずにおきます。私としては何よりも、あなたが性急にことを進めた挙句あなた自身に危害が及ぶようなことがないように願っているのです。今はもう、日本の友に書いてもよいし、知らせてもかまいません、任務は果たした、R. R.が引き受けた、と。	この手紙に関しては拙論「多喜二とロマン・ロラン——伝説の「事実」と「真実」——」を参照（小樽商科大学「人文研究」118輯、2009年）。ここで言われた「抗議文」こそが、小林多喜二虐殺への抗議文ではなく、1932年7月20日付けで日本共産党中央委が世界の労働者大衆に向けて発したアピールだった。それを高田が仏訳し、ロマン・ロランが推敲して「ユマニテ」に送り、共産党首マルセル・カシヤンがコメントを付して、1932年9月29日の同紙第一面に、「日本の白色テロ」と題される記事となって登場したのだった。（図版1参照）

		抜 粋	補 注
10	1933/2/16	<p>昨日、妻からの手紙が届き、片山の妻が亡くなったことを知らされました。片山もまた病弱なうえに感じやすい心の持ち主ですから、私は彼が病気になってしまうのではないかと心配です。私から先生にお願いしたいのですが、あなたから一言彼に伝えて励ましてやっていただけないでしょうか。今の彼にはあなたからの精神的な力添え慰めの言葉が必要なのです。</p>	<p>高田のこの手紙を受けて、ロマン・ロランは1933年2月21日に片山に弔慰の手紙を送っている。「したいしい友よ、あなたがあなたの親愛な夫人を亡くされたことを私は高田〔博厚〕を通じて知ったばかりです。私の妹と私とはあなたの喪しみにまったく心を浸されています。あなたがその悲しみに耐えることに、私たちの愛情が助力することが出来ればいいと願います……」(みすず書房全集35巻、1962年、114ページ)</p>
11	1934/1/22 高田 → ロラン	<p>国を離れたのは既に3年前のことであり、その3年間、私は平穩に暮らすことができました、少なくとも自分の彫刻に打ち込むことができました。しかしそれはとりもなおさず、日本をその苦しみから救おうとする国内の戦いから実際には遠ざかっていることができたということにほかなりません。フランスにいる私は、豊かな生活に酔い痴れるがごとく、芸術の喜びに浸っていられるのです。しかしそう思い至れば、私はむしろ自分が恥ずかしくて仕方ありません、遥か彼方の我が国はどうなってしまうのかと思うからです。危惧していたとおり、日本はますます悪く、酷くなりつつあります。</p>	
12	1934/2/3 ロラン → 高田	<p>あなたの心の痛みはよく分かります。芸術家というのはおよそ戦い向きにはできていないのに、生きているからには戦いは不可避です。だから芸術家はそこから逃避しようとするのです。——しかし私はその点では芸術家ではありません。</p>	
13	1934/4/22 高田 → ロラン	<p>(高田の仲介で雑誌「改造」への執筆依頼、またそれに関する報告等々。) 今日あなたに手紙を差し上げるにはもう一つの用件があります。——昨日、日本の大手の雑誌『改造』の編集者から電報が届き、四月号にあなたの論考を掲載したいので、彼のもとに送ってくださるようあなたにお願いしてほしいと依頼してきたのです。</p>	<p>こうして高田が仲介の労をとった依頼の結果、雑誌『改造』の創刊十五年記念号(1934年4月号)には、A・アインシュタインの「平和のために」と並んでロマン・ロランの「藝術と行動—レーニンに於ける—」が掲載されることとなったが、先行する手紙でロマン・ロランが見通していたように、この時代の日本でレーニンを称える記事であるから、そこには少なからぬ伏字が見られる。そしてその後ロマン・ロランの文章がこの雑誌に登場することはなかった。</p>

		抜 粋	補 注
14	1936/8/14 高田 → ロラン	日本の音楽雑誌「音楽研究」が、あなたを讃える特集号を9月に出す旨私に伝えてきました。そしてあなたから一言読者へのメッセージを送ってくださるようお願いしてほしいと頼まれました。	この後、1936年10月に『音楽研究』（第二巻、第一号、共益商社書店発行）が「ロマン・ロラン記念號」（70歳記念）として発行され、片山敏彦や尾崎喜八が寄稿しているが、ロマン・ロランから日本の読者に向けたメッセージが寄せられることはなく、『ジャン・クリストフ』からの一節が「音楽への頌歌」として紹介されている。また、高田の寄稿も実現しなかった。
15	1938/3/4 高田 → ロラン	ギリシャ旅行の途中やってきたアグリジェントでこれを書いています。パリを発つ直前にヴィルドラックに会いました。ありがとうございます！ お二人のご厚情に感謝のあまり、今は言葉もありません。	1938年春に高田は、朝吹三吉、登水子兄妹とシチリア旅行をし、次いでその足で佐藤巧茂らとギリシャ旅行をした。その途次、シチリア島南部のアグリジェントから出された短信だが、エンペドクレスの出身地であるこの町で、この哲学者を愛したロマン・ロランを思っこの絵葉書を出したのだろう。ここにロマン・ロラン夫妻に対する感謝の言葉が述べられている経緯は想像するのみである。
16	1940/4/11 高田 → ロラン	日本の有名雑誌「改造」の編集長がフランスに来ました。「改造」といえば、6年ほど前にあなたの許可を得て記事を一点掲載させていただいた雑誌です。その編集長が、様々な著名人と会うために世界を回っているのです。	編集長とは改造社社長山本実彦（1885-1952）で、この時立憲民政党所属の衆議院議員。かつてアルベルト・アインシュタインやパトリック・ラッセルを日本に招請した人物であった。
17	1940/4/17 ロラン → 高田	あなたにこれを書いている今、私はひどいインフルエンザで、39度か40度の熱があります。しかし一週間したら（4月23日火曜日ということですが）私の状態も良くなっているかもしれませんから喜んで山本氏にお会いしましょう。	
18	1940/4/19 ロラン → 高田	今回予定されている来訪を4月24日に水曜日に延期してもらえないだろうか。22日月曜日から23日火曜日にかけて妹が私と二人きりでくつろごうとはるばるやって来るので、この二日間は彼女のために空けておきたいのです。	その後会談は実現し、ロマン・ロランはそのことを日記に記している。「4月30日——日本人彫刻家高田が、日本の出版社社長で月間雑誌「改造」の主幹である山本実彦を案内してパリからやってきた。山本氏は西ヨーロッパをめぐる途次にある。五、六十歳のずんぐりした体躯で顔は大きく、謹厳実直で自由な判断力をもった知性人であることは間違いない。中国について彼が話したことからもそれはよく分かる。……現下の戦争の行方がどうなるか、彼は等しく中国のためにも日本のためにも案じている。」

		抜 粋	補 注
19	1943/5/15 高田 → ロラン	今月終りか来月始めの二、三日間ほどヴェズレーにお邪魔してもよろしいでしょうか。またその時に、私の親しい仕事仲間のハンガリー人、ドクター・タインを同行させてもよろしいでしょうか。彼も私と同様今はジャーナリズムの仕事に関わっているのですが、無論食っていくためのです。御宅に伺うとしても、それは新聞記者として行くわけではありません。私は新聞記者の仕事が嫌いです。	新聞記者高田博厚については「世界最小新聞社社長」を参照のこと（日本フランス語フランス文学会北海道支部論集「Septentrional」3号、2014年）。（図版2）
20	1943/5/20 ロラン → 高田	手紙をありがとう。——いや、今あなたが来るにはおよびません！ 私のほうがパリに行きますから、6月始めにね。私が大病を患っていることはご存じでしょう。僻地にある我がヴェズレーでは受けられない医学検査が必要なのだそうです。	
21	1943/6/8 ロラン → 高田	私たちは2週間の予定で今パリに来ています。あなたに会うことができれば嬉しく思います。10日木曜日から次の日曜日——できれば午後——に来ることはできますか。ただし前もってあなたの都合のよい日時を知らせてください、——他の約束を調整する必要がありますから。	
22	1943/6/16 高田 → ロラン	もしもお邪魔でなければ、次の日曜日午後6時頃にお目にかかりたく思います。一言御挨拶申し上げるついでに、ささやかながらお宅に食糧補給をするつもりなのです。	被占領下での高田の「食料補給」についてはロラン自身も日記に書き留めている。1942年6月22日月曜日：「午後、不意に高田が訪れた。すっかりめかし込んで、たくさん土産を届けてくれた（貴重なお茶も）。」1943年6月10日木曜日：「アルコス夫婦と高田が来訪。いつものように、両手いっぱい贈り物を抱えて。」『ヴェズレー日記』（pp. 804, 912）
23	1944/3/5 高田 → ロラン	ソミュールへは彼(Marcel Martinet)の葬儀に立会うために行ったのです。パリの友人として参列したのは私一人でした。町から離れた質素な墓地まで葬列に同行したのは土地の人々ばかりです。彼が亡くなる2週間前に、奥さんが私に彼の重体を伝える手紙を送ったそうなのですが、その手紙は私のもとに届かなかったのです！ 彼が死ぬ前日になってやっと私は容態がほとんど見込みがないことを知り、彼の息子と共に車で発ったのですが、しかしその日の朝に彼は亡くなっていました。葬列で棺の覆い紐を持ったのは私でした。つまり、遠い異国の人間がその役を果たさねばならなかったのです"	ロマン・ロランとマルティネの交流と断絶を高田は『分水嶺』の中で回想している。（pp. 277-278）また、この書簡で語られているマルティネとの交流とそこで交わされた言葉については、高田の著『薔薇窓（ロザース）』にさらに詳細が伝えられている。その後同年8月末には高田はベルリンに移送され、ロマン・ロランは12月30日に死去した。この手紙が往復書簡の最後となった。

参考文献 高田博厚『分水嶺』岩波現代文庫、2000年
 高田博厚著作集Ⅱ『薔薇窓』、朝日新聞出版社、1985年
 Romain Rolland, *Journal de Vézelay 1938-1944*, éd. Bartillat, 2012

LES PETITS MÉTIERS DE PARIS

LE DIRECTEUR DU PLUS PETIT JOURNAL DU MONDE

Un ancien jardin au fond de l'arrière-cour, où les arbres prennent des contorsions bizarres, parées les murailles et les toits de fleurs. Des ateliers d'artistes, une passerelle en-dessus du jardin, la façade luxuriante de l'immeuble, sorte de paquebot immense dans la nuit.

Vous Hirouata Takata, le directeur du plus petit journal du monde, petit bout d'homme sans mystère, dans une cuisine étroite.

Mais parlons-nous de politique internationale? Aussitôt la souffrance crie le visage de Takata. On a l'impression que ce petit homme a la force de tenir aussi facilement qu'une orange la boule de l'indépendance dans la creux de sa main. Comme une mappemonde, la terre tourne dans la main de Takata. Il joue avec la boule. Le spectacle barbare qui se joue actuellement sur le globe semble se dérouler sous nos yeux. Le visage de Takata reste impassible.

— La terre est une sorte d'orange indivisible. Si nous nous la partageons, nous serions assaillies de cette poignée d'industriels qui font mourir quotidiennement des milliers d'hommes, de femmes et d'enfants pour assouvir leur instinct de pouvoir.

Hirouata Takata sait, par expérience, qu'il n'est pas neveu d'un homme. Son journal, créé dans son but pacifique, est encasé sous enveloppe opaque soit par la poste ou par avion. Il s'en va qu'une dizaine d'abonnés pour tabac et café relativement assez cher. Une

dizaine de lecteurs sont à Paris ; les autres, personnages tous inconnus, sont dispersés dans les grandes villes et les provinces. Ils s'occupent par ce journal rédigé en japonais, uniquement pour des Japonais, quel rôle joue Takata par rapport aux cinq parties du monde.

Takata, qui est en même temps le traducteur de Romain Rolland au Japon, lui, fait ce journal.

中華通信銀行設立



TAKATA rédigeant son journal

Il assume le rôle de directeur responsable. Il rédige, compose les caractères, corrige, imprime sur Rouleaux forment ordinaire d'une feuille dactylographique par ses propres moyens. On pense à Balzac frémillant chez la petite rue Visconti pour imprimer ses livres. Et par une autre coïncidence, encore plus heureuse, qui nous permet même d'évoquer Rodin, Takata est également sculpteur. Des moules sous leurs lignes humaines, des formes de femmes nues, magnifiques, des études, et les

statues de Romain Rolland et de sa femme, d'Alain, de Charles Villard, de Tristan Rémy, de Léonard de Vinci, de Takata.

En brûlant des cigarettes, Takata prépare au page de spécimens : théâtre, cinéma, musique, exposition d'art et, dans la même rubrique, l'adresse de deux ou trois restaurants japonais à Paris, où l'on mange du poisson cru. Toujours très calme, Takata téléphone,

ou envoie des télégrammes qui lui parviennent de toutes les villes du monde. Avec son style, il compose en japonais des signes idéographiques qu'il dessine de haut en bas comme un minuscule. C'est à la fois un hiéroglyphe, représente une idée. Deux arbres émergeant au bout, la forêt est figurée par trois arbres. Un homme sur une montagne représente un ermite. Une femme entre deux hommes indique le viol ou l'adultère.

L'écriture japonaise comprend aussi de trente à quarante mille signes. On ne peut pas les connaître tous. Mais chacun signe, avec un hiéroglyphe n'indiquant l'âge de la liberté ou du repos hebdomadaire. Ces mots n'ont aucune signification dans le langage nippon.

Dans la simplicité de son ignorance primitive, le peuple japonais ne s'imaginer même pas qu'il pouvait avoir une sentiment de classe à lui quel, selon la forte expression de Charles-Louis Philippe s'adressant à Barrès.

Albert FOURNIER.

ロマン・ロラン日記抜粋

ロマン・ロランと高田博厚との間で交わされた書簡に関して、そのいくつかが書かれたときの背景となる事情を明かしてくれる記述をロマン・ロラン自身の日記の中に見つけることができた。そこから三点の抜粋を紹介する。いずれもパリ・フランス国立図書館のFONDS ROMAIN ROLLANDに保管されているロマン・ロランの日記（三百ページ程度の白紙の手帳が年一冊の割合で利用されている）のマイクロフィルムを閲覧して拾い出したものであり、対応するページは元の手帳のものである。

① R・R日記1931年4月：高田との最初の出会いに触れて。

MF17337 (microfilm du ms : NAF26568) pp. 59-61.

T・片山がわれわれに別れを告げに、日本人の彫刻家、H・高田を伴って訪れた（4月2日）。片山は二年間ヨーロッパに暮らした。その間彼は努めて芸術都市や美術館を見て回ったが、私からすると、その背後にある精神や社会の有様をしっかりと知ろうとしたようには思えない。これは、日本からヨーロッパにやって来る友人全般に対して私が咎めたい点である。彼らは自分たちだけでまとまりすぎる。そしてわれわれと交わるとなると、今度はR・Rの友人以外の人間を見ようとしなないのだ。そうでなければ、小柄で素敵なあの上田秋夫と同様で、一年パリに住みながら、カルチェ・ラタンの薄汚れたホテルに籠って、優美なポエジーを夢見続ける。——対するに高田はもっと生氣漲る庶民的な人柄だ。彼の大きな赤ら顔には何かしら苦悩の影が浮かび、そこに荒々しくたてがみを靡かせている。彼は日本でコミュニストの宣伝活動に加担した廉で投獄された経験がある。¹（だから彼はシベリア横断鉄道でヨーロッパに来ることを禁じられたのだ。）彼は見せかけだけの旧式の彫刻家ではない——彼が見せた自分の作品の写真から判断する限り（胸像もトルソも力強く表現力があり、なおかつ美しさが損なわれていない——妹も私も驚いたその作品の顔立ちはといえば、今やこの日本人たちは、フランスあるいは他のヨーロッパの人間といかに近いものになっているかと思わせる——われわれにはわかる——とりわけそのフォルムがわかるのだ。抑えがたい新時代の息吹きが、その精神でもって、それぞれの種族人種がもつフォルムを純化するのだ。私は躊躇わずに使っただろう、——男も女も合わせて——その人物像の三分の二ほどを我が『魅せられた魂』のアネットの周囲に配するために）。だから私は、高田は見せかけだけの彫刻家ではないと言うのだ。彼は熱烈に、芸術のフォルム見つけようと挑んでいると同時に、日本における私の忠実な翻訳者の一人でもある（彼は我が偉大なるベートーヴェンを訳してもいる）。さらに彼は私を喜ばせてくれた、私がベートーヴェンを弾いてやっている間（最晩年の作品：変奏曲とバガテル）、彼がまるで水牛よろしく、呻いたり、ため息をついたり、喘いだりするのが聞こえたのだ。私が弾き終えた時には、彼は話すことも、歩くこともできなかった。ちょっとでもつついたら、彼は叫び声をあげるか、泣き出しそうだった。私は彼が気にいった。——彼は三、四年ヨーロッパに暮らすという。彼の関心は今のところ十五世紀のフィレンツェ彫刻に向いている。だが彼はいずれその先まで行くことだろう。

- ② R・R日記1931年12月：ガンジーのロラン訪問の際、高田一人がパリから招かれた経緯。ロランの手紙(1931年12月2日付)および高田の手紙(1931年12月3日付)に対応。
MF17337 (microfilm du ms : NAF26568) pp. 180-182.

ついにここ数日内に、はるか以前に公表されながら繰り延べされてきた、ガンジーの当地訪問が実現する。この訪問がひと月もふた月も遅れたのは、ロンドンでの協議の円卓会議がいつこうに進展しなかったからだ(そしてまたこのたび重なる遅れは我が妹の疲労を募らせる原因にもなっている。彼女は以前からヴィルヌーヴを離れたがっていたのに)。——ミラ(ミス・スレイド)を介して、山ほどの郵便や電報をロンドンとの間で交わさねばならなかった。——さらにまた、ガンジー到来に関わるありとある種類の、これまた無数の手紙、電話、申し入れを相手にしなければならぬのだ。その中には、異様なもの、突飛なもの、気違いじみたものまである。(あるイタリア女性は、次のロト宝籤の10ケタの当選数字を知りたいがために、私の伝手でガンジーに手紙を書いて尋ねたいという始末だ…) ドイツ系スイス人“ヌーディスト”たち(ヴェルナー・ジンメルマン)がガンジーを自分たちの虜にしたがっているというので、これを防がねばならない。“神の子”と称する頭のおかしな連中が、カタツムリよろしくぞろぞろとまさに地中から現われる。善男善女の一団が、マハトマの窓辺の下で夜な夜な笛とバイオリンの小曲を奏でて差し上げましようとして申し出る。“レマン湖酪農組合”が、電話越しに威儀を正して、ガンジーの滞在中、“インド王”にも引けを取らぬ“食糧補給”を請け負いましようと言ってくる。新聞社がこぞってやって来て、街の周囲に野営する。ローザンヌ警察本部は不測の事態に怯えている。ヴィルヌーヴのホテルは、風変わりな異国の賓客を一目見ようという“うるさ方”たちで溢れている。ならば私は、あの若い日本人彫刻家高田にパリから来る旅費を与えて、ガンジーに会わせ、スケッチをさせてあげることにしよう。

ガンジーは12月5日土曜日にロンドンを発ち、晩はパリで過ごす、マジック・シティで催される集会で話した後、われわれの友人ルイゼット・ギイエス宅に泊まる。日曜午前にターリテットに向けて出発し、そこには晩の六時に到着する。すでに真っ暗で、天気も良くないから、私の健康状態では迎えに出られない。(彼が我が家の客である間、私は外出することができないだろう——彼の帰国の日にヴィルヌーヴ駅まで送ってゆく以外には。)しかしエドモン・ブリヴァ夫妻がパリまで迎えに行ってくれたし、妹がターリテットの駅で彼らを待ち受ける。ヴァーローブからこちらのスイス内の道中はお祭り騒ぎだ。ここでは、ニーハンスとペレの両博士が、ガンジー一行の滞在中彼らの車を使わせてくれる(だが彼のことから、車はわずかし、あるいはまったく使わず、どこに行っても利用してきた一番質素な移動手段——鉄道の三等車を望むかもしれない)。

- ③ R・R日記1932年5月：高田がロランの胸像作製のためスイスに行く。ロランの手紙(1932年4月25日付)および高田の手紙(1932年4月27日付)に対応。
MF17338 (microfilm du ms : NAF26569) pp. 137-139.

高田博厚がパリからやって来て、私の胸像をこしらえる。彼は五月前半の二週間ヴィルヌーヴに滞在する。彼には才能がある、しかしその独学の技術はまだ完成されたものではない。彫刻を

始めてわずか2年だという。²その前は絵をやっていた。同じく以前は哲学しながら生きていたという。——初めて見る変わった若者だ、暗く、謎めいて、幾分精神的な動揺が窺える。私は“自分の知る”日本人のイメージにいささか自信をなくした。彼ら、私の知る東京の“イデアリスト”たちは皆、これまで何をもたらし、何をやってみせてくれたというのか？ 人の生き方の決め手となろうこの時に、彼らからは愛を語る声が聞こえてこないのだ。思うに彼らはパリの若いインテリ・ブルジョワと似たようなものではないのか、——パリの若いインテリ連中は、若い時には一時なりと、社会に抗う情熱を滾らせるものなのだ、その後はやがてコクトー流の耽美主義者に成り変わったり、——デュアメルのように、我が身に不都合でなければ社会状態の保護的不正に順応するようになったりするものなのだが。——“我が”高田は東京の“イデアリスト”たちより気質は強烈なところがあり（彼には高く厚いサムライのたてがみがある）、数カ月は“コミュニスト”だったほどだ。だが同時に彼は、将校の娘婿あるいは将校か憲兵の兄弟でもあり³、また近頃暗殺された日本国首相の息子である帝国主義者を親友にもっていたりもするのだ⁴。彼の話は直ちに前後のつながりがつくものばかりではない。——さらにまた、彼と一貫した長い話をするのはひどく難しい。大半の日本人と同じく彼の言葉もまた、ヨーロッパの言語には移しがたいものを秘めている。（かくも易々とフランス語を身につける中国人とは全く対照的だ。）こうした言語的不適応には、自尊心の強さとともに、おのれをさらすことを恥じる慎み深さが大いに与っているのだと思う。彼らは自分が話している言葉を直してくれと人に頼もうとしないし、相手に対して打ち解けることもない——ただしごく稀にそれが起こると、情熱は押しとどめようもなく爆発的に溢れ出す。

高田は私の胸像を粘土でこしらえ、次いで石膏の型を取った（粘土のオリジナルはほぼ破棄されている）。——彼はまたマーシャの顔もスケッチしたのだが、硬くきつい特徴ばかりを強調した描き方で、本来自然の彼女らしさの四分の三からが失せてしまった。彼の関心は顔にばかりあるようだ。——（同様に、私の胸像についても、彼は目をないがしろにしている。彼が言うには、「目、そんなもの面白くありません！ 表現において大事なものは口なのです…」）——今どきの芸術家というのはなんと未完の器ばかりだ！ 彼らは、自然さを捉えるに、その顔の耳の端程度しか見ていないのだ。

¹ 正確には留置場(dépôt)であったのだが、フランスの友人たちには監獄(prison)に入れられたと伝わっていた経緯がある。『分水嶺』57-58ページ。

² 高田の発音のせいでロマン・ロランが聞き違えたのだろう。実際には12年だった。

³ 高田の次兄典文は陸軍士官学校出の憲兵であった(大野惇氏の確認による)。ロランと対話したときの高田のフランス語が不明確だったため、このような記述になったのだろう。

⁴ 1932年5月15日に暗殺された犬養毅の息子犬養健と高田は知己の関係にあった。